

## 7章：学校との関わり方！塾との関わり方！

わが子は小学校6年生から塾に通い出したので、塾との関わりは短い方だ。そんな中でも、学校と塾との関係や学校の先生の言うことや塾の先生の言うことのどちらを選択するかを、夫婦で話し合うことは多々あった。具体的な例をいくつか挙げて、どのように対処していったかを記していくが、ここでも大切なのはまずは子どもの意見。そして選択肢や考え方を親は伝えるが、最終的な判断は必ず子ども自身がすること。自主性を損なわないためには、とても大切なことだと常に意識していた。

まずは学校との関わり。塾へは夏休みの夏季講習と夏合宿から参加したため、学校の夏休みの宿題にあまり身が入らなくなって来ているのを、日々の会話の中で感じていた。ほとんどの受験生にとっては学校の課題は基礎ばかりで、正直退屈なものになってしまう。でも、必ず提出しないとイケない。出来れば、その時間を受験勉強の時間にしたい。そこで我々親が、日頃担任の先生と適度な距離で、適切な関係を築いていけば、まずは受験することを丁寧に説明し、理解を得、例えば漢字ドリルの練習を受験漢字の練習に代えてもらえないかと交渉出来る。あるいは、算数ドリルについても同様の対応が出来る。なお、公立小学校の先生の中には、私立中学受験に対して理解のない先生も一定数いる

ことも事実。そして、自由研究についても息子は『三平方の定理』の証明についてのレポートを書き受験に役立つ内容にすることが出来た。その他の“夏の友”のような冊子については、これは苦痛でも気晴らしにやること。全て放棄してしまうと、学校との関係、担任の先生との関係は適切に保たれない。受験本番まで協力的に温かく見守っていただくことはとても大切なこと。間違っても「やっても意味がないからやりたくない」「受験勉強の時間が無くなるからやらない」と子どもが直接、担任の先生に言うことは無いようにした方が良いと思う。相手の立場を理解することは、大人になっていく過程でとても大切な能力なので、このような場面で身をもって体験してもらいたい。

次に塾との関わり・・・

**※全文をご覧になりたい方は小冊子プレゼントフォームへお進みください。**